

# 女子大学生の英単語保持成績の違いによる記憶方略の効果の認知

○多鹿秀継(神戸親和女子大学)

堀田千絵(関西福祉科学大学)

キーワード: 記憶方略の効果の認知, 英単語記憶成績, 女子大学生

## 目 的

女子大学生の英単語の保持成績の違いによって、英語の単語や文章を記憶するとき使用する記憶方略の効果の捉え方に違いがあるのかどうかを吟味することであった。

## 方 法

(1)女子大学生3年生と4年生の52名が2種類の課題に参加した。

(2)1つは英単語のテスト課題であり、学習心理学の授業で紹介した基本的な英単語12項目の意味を求める課題であった。1項目2秒の視覚提示で項目間間隔は1秒であった。

(3)他は、英語の単語や文章を記憶する場合に、記憶研究において効果的だと考えられている5つの記憶方略(Bと表記)を、リハーサル等の一般的な記憶方略(Aと表記)と対して提示し、比較・選択させる課題であった。心理学で効果的とされる5種類の記憶方略は、分散学習方略(Q1)、自己テスト方略(Q2)、イメージ方略(Q3)、塗りつぶし方略(Q4)、体制化方略(Q5)であった。具体的には、Q1では、Aの集中学習方略とBの分散学習方略を比較させた。課題はQ1からQ5まで、AとBのそれぞれ2つの記憶方略に対して、記憶するのに効果的であると考えている方を選択させ、かつ、1「もっとも効果的」、から3「やや効果的」の3種の程度の1つを選択させた。2つの記憶方略のどちらも効果的であると考えている場合は、「2つとも、同じ程度に効果的である」(Cと表記)を選択させた。この課題の作業時間は、教示も含めて5分であった。

## 結果と考察

(1)記憶テストの成績を1つ1点として採点し、平均値(M=5.88, SD=2.71)をもとにして上位群(n=30, M=7.83, SD=1.53)と下位群(n=22, M=3.23,

SD=1.31)に二分した。

(2)記憶方略の質問結果に対して、Aの1~3を選択した場合に1~3点、Cに4点、Bの1~3に7~5点として得点化した。4点から得点が離れるほどに、AあるいはBの記憶方略をより効果的と考えているといえる。表1に結果を示した。

(3)表1の結果から、全体的に心理学で効果的と言われている記憶方略を効果的と認知していることがわかる。表1の結果を吟味したところ、上位群と下位群は、ともにQ1とQ2において心理学で効果的と考えられている記憶方略を有意に選択していることが分かった。また、上位群は、Q3とQ5において、下位群では、Q4において、心理学で効果的と考えられている記憶方略を有意に選択していることが分かった。

(4)上記の結果から、英単語の成績にかかわらず、研究参加者が授業で紹介した記憶方略のいくつかを適切に理解していたことがわかる。また、Q4に関しては、記憶方略としてはそれほど効果的と考えられないが、注意を引きつける効果から、下位群では効果的ととらえたのであろう。昨年度の結果と異なり、リハーサル方略をより効果的と考える結果は上位群も下位群も見られなかった。

Table 1 記憶方略質問の調査結果

記憶方略質問					
選択結果	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
上位群					
M	6.00	5.30	5.33	4.63	5.00
SD	1.17	1.99	1.77	2.11	2.00
n(人数)	30	30	30	30	30
下位群					
M	5.50	5.45	4.23	5.00	4.50
SD	1.99	1.68	2.41	1.72	2.13
n(人数)	22	22	22	22	22